

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00323

研究課題名(和文)「東家流『古今集』注釈書研究」

研究課題名(英文)The research of the To family's annotation on "Kokinshu"

研究代表者

竹島 一希 (TAKESHIMA, Kazuki)

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：10733991

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：東常縁は宗祇に古今伝授を行ったことで、古今伝授の実質的な始祖とされる。常縁の『古今和歌集』講義を聞いた宗祇がまとめた『両度聞書』以外に、東家に伝来した『古今集』注釈書は知られていなかった。今回の研究では、奥書に常縁の名前のある『或聞書中有所存抜書』を端緒に、諸書に散在する東家伝『古今集』注の名残を指摘した。具体的には、三条西家集成『古今集』注に書き込まれた付き片仮名細字注、『永正記』の東家説、『古今集抄』(平松抄)の東殿説は、いずれも同じ書物からの引用である。その東家伝『古今集』注は、『両度聞書』より低位の、全歌注であったと推定できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東常縁が宗祇へ伝えた『両度聞書』は、常縁の師の堯孝の説そのものであり、そこに常縁説、東家説はほとんど含まれない。東家は、東胤行(素暹)以来、勅撰歌人を輩出する、武家歌人の名家である。その東家に、家説がなかったとは考えにくい。今回見出された東家『古今集』注は、最高の秘説である『両度聞書』には及ばないものの、それ故より多くの門弟に伝授されたと思しい。東家『古今集』注の発見によって、東家伝来の家説の内実、低位の伝授の実態を知ることができた。さらに、東家『古今集』注は、他の注釈書に紛れ込んでいる可能性もあり、これを基準とすることで新たな注文が見つかることも期待できる。

研究成果の概要(英文)：Tsuneyori TO is considered to be the de facto founder of Kokindenju because he conducted Kokindenju to Sogi. Except for "Ryodo kikigaki" compiled by Sogi, who listened to Tsuneyori's lecture on "Kokin Wakashu", no commentary on "Kokinshu" was known to have been handed down in the To family. In this research, I pointed out the pieces of the To family's annotation of "Kokinshu" that are scattered in various books, starting with "Arukikigakichu shozonarunukigaki", whose postscript has the name of Tsuneyori. Specifically, the katakana small character notes with a circle written in the "Kokinshu" compiled by the Sanjonishi family, the To family theory in "Eishoki", and the Todono theory in "Kokinshusho", all quotes are from the same book. It can be presumed that the To family's original annotation of "Kokinshu" was added to all poems, which was a lower level than "Ryodo kikigaki".

研究分野：中世文学

キーワード：東常縁 宗祇 古今伝授

1. 研究開始当初の背景

東常縁から宗祇へ、文明三(1471)年から同五年にかけて、『古今和歌集』の秘説を伝授する古今伝授が行われた。これが、伝授者・伝受者・伝授年月日がいっきりとしている、最古の古今伝授であるとされる。もとより、常縁はその師・堯孝から伝受したのであるが、伝授方法等が未詳であることもあり、常縁が古今伝授の実質的な開祖と看做されている。

常縁は、自身が二流の学統を受け継いだと主張する。一つは、師の堯孝から受け継いだものである。二条派常光院流のリーダーであった堯孝に弟子入りした常縁は、堯孝から悉皆伝授を受け、その学問を継承した。いま一つは、東家伝来のものである。常縁は、郡上東家初代・胤行(素運)が藤原為家から伝授を受けたと主張する(『実隆公記』文明十八年七月一日条)。これが事実であるか確認できないが、東家の歴代当主は勅撰歌人であり、胤行以来、東家内部で歌道の修練が行われていたことは確実であろう。

常縁から宗祇への古今伝授において、その根幹をなすものは、常縁の『古今集』講義を宗祇が聞き書きした『古今集両度聞書』である。常縁に従えば、常縁には二流が流れ込んでいるのであるから、『両度聞書』には、(1)堯孝説、(2)東家説(常縁独自説)が入っており、しかも筆録者である(3)宗祇説も含まれている可能性もある。このことについて、長谷川 2008 は、『両度聞書』が(1)堯孝説に基づいており、(2)東家説は(1)堯孝説と明確に区別できるように書かれていることを論じた。しかも、(2)東家説は『両度聞書』に2例しかなく(正しくは3例。479、535、1027番歌)それが(1)堯孝説と区別できるような形で付加されており、『両度聞書』のほとんどが堯孝説であることを論証した。

では、常縁の主張する東家説とは、本当に存在したのであろうか。また、それはどこに見出すことができるのか。

2. 研究の目的

「1. 研究開始当初の背景」で述べたように、東家説を探究することを研究の大きな目的とする。具体的には、次の細目を追究することである。

(1) 東家説の存在

常縁は、最初は冷泉派の清巖正徹と親しくしたが、宝徳二(1450)年に堯孝に正式に入門した(『東野州聞書』)。また、常縁の子である縁数(頼数)、常和は、堯孝の弟子であった堯恵より伝授を受けたことで知られる(鶴崎 1988)。正徹や堯孝、堯恵らの学説と区別できる形で東家説が存在するのか、確認する。

(2) 東家説の内容

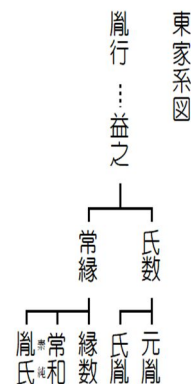
東家説の存在が明らかになったなら、それを常縁周辺の『古今集』注釈書と比較し、相違点を探る。同時代では『両度聞書』の堯孝説、『古今集延五記』の堯恵説、また『古聞』以下の宗祇説、それ以前では『顕注密勘』『僻案抄』の藤原定家説等である。

3. 研究の方法

申請のための予備調査を行ったところ、東家説の断片らしきものを見出すことができた。

曼殊院蔵『或聞書中有所存抜書』(以下、『或聞書』)の奥書には、「右注者、二条家東下野守相伝也。ノ本云右注者、東下野守相伝本也。同中務丞より相伝了。ノ明応三年六月十六日 土岐浜豊後入道宗元在判」とある。この奥書からは、『或聞書』が、「東下野守」(東常縁)から「同中務丞」(東元胤)に伝えられ、さらに「土岐浜豊後入道宗元」(浜慶康)へと伝わった注釈書であることが分かる(実際には、その抜き書き)。浜慶康は、常縁周辺で活動する、文学に関心の深い奉公衆である(秋定 2006)。『或聞書』は全歌注ではなく、180首近くの抜粋しかない。とはいえ、『或聞書』は、『両度聞書』とは別の、東家で伝えられたことが明らかな注釈書である。すなわち、『或聞書』は、東家説の基準となり得るのである。

さらに、浅見 1992 は、『或聞書』と三條西家集成『古今集』注釈書の一部(細字片仮名交り注)が一致することを指摘する。三條西家集成『古今集』注釈書(以下、三條西家注)とは、武井 1989 が指摘した、本来は三條西家に伝来した一具の『古今集』注釈書である。現在は、東京大学(巻一～巻九、巻一～巻一九)、宮内庁書陵部(仮名序、巻一〇、巻二〇)、広島大学(真名序)に分蔵される。そ



の構成は、一首ごとに『両度聞書』、『古聞』(宗祇 肖柏) 公条聞書(石神 2002) 細字片仮名交り注と並べ、宗祇流の注釈を集成している。このうちの細字片仮名交り注に、『或聞書』と一致するものがあるという。

ここに、『或聞書』と、三条西家注における細字片仮名交り注という、二つの東家説が見出され、これを基準に、諸注釈書に見える常縁説、東家説の真実性を確認していく。

4. 研究成果

(1) 『或聞書』と一致するのは、三条西家注の 付き細字片仮名交り注であること

三条西家注の細字片仮名交り注については、石神 1983、石神 2002 が宗祇講義の聞書かと推測している。但し、浅見 1992 が指摘する、『或聞書』と一致する注文は、宗祇講義の聞書の部分ではなく、頭に が付けられた注文であることが分かった。すなわち、細字片仮名交り注は数種類に分かれていたのである。

また、『或聞書』は抜注であるため、三条西家注内の全ての 付き細字片仮名交り注と一致するわけではない。しかし、『或聞書』と一致する注文はすべて 付き細字片仮名交り注であることを裏返せば、本来、 付き細字片仮名交り注は『或聞書』の親本に存在した注文であったと推定できる。『或聞書』と三条西家注における 付き細字片仮名交り注を集成すれば、『或聞書』の親本がある程度復元できる。なお、『或聞書』の親本は、全歌注であったと思われる。

(2) 『永正記』の「東家の聞書」は、『或聞書』の親本であること

片桐 1987a が紹介した『古今集』注釈書『永正記』は、永正十四(1517)年に行われた大谷泰謀の講義を、子の泰昭が聞き書きしたものが基盤となっている。そこには、泰謀の師であった宗祇の説、鳥居小路経厚(堯恵門)の説、また泰昭が補った「家々ノ書」の説が載せられている。

『永正記』に頻出する「東家の聞書」「東家本聞書」などと呼ばれる注釈書について、片桐 1987b は内容を吟味し、それが東家流の注釈書であることを確認した上で、「引用されている当該注釈書の存在」は確認できないと述べる(p.65)。しかし、例えば 88 番歌に「東の家の本聞書」として引用される注文が、『或聞書』、三条西家注(東大本)と一致することから、「東家の聞書」が『或聞書』の親本であることは明らかである。

(3) 『平松抄』の「東殿」説は、『或聞書』の東家説の書き換えであること

片桐 1987c によると、京都大学附属図書館蔵の『古今集抄』(以下、『平松抄』)は、室町後期成立と目される諸注集成である。新井 1980 の指摘に従えば、『平松抄』中に「東殿」の名を 107 回見出すことができる。この「東殿」について、片桐 1987c は、やはり『平松抄』中に名に見える東師胤のことと推測した。

しかし、1064 番歌の注で、「東殿の義」と「師胤の義」とが並記されていることから、「東殿」と「師胤」は別人であると思われる(同一人であれば、同じ注釈内部で名前を分ける必要はない)。「平松抄」は引用に当たり、出典の注釈書を相当書き換えているので、『或聞書』等の東家説と完全に一致しない(同趣旨ではある)。とはいえ、1096 番歌の注で「東殿」説のように『法華経』譬喩品を持ち出すのは『或聞書』しか見出せない点や、「(5) 東家注は『両度聞書』よりも低位のレベルであること」で後述する 691 番歌注などを見れば、「東殿」説は東家説であると認めて良いと思われる。

(4) 『或聞書』の親本は、曼殊院と青蓮院で共有された可能性があること

曼殊院は多くの古今伝授関係資料を蔵するが、『或聞書』以外にも、東家に関わる資料を有することが報告されている(新井 1976)。堯孝門弟の堯恵から頼数へと伝授された資料である。『或聞書』、またはその親本が、頼数旧蔵であった可能性がある。

さらに、『永正記』の筆録者である大谷泰昭は、鳥居小路経厚より伝授を受けたが、堯恵から経厚へと伝えられた注釈書が曼殊院に残されている。鳥居小路氏は青蓮院の庁務であり、泰昭の大谷氏も青蓮院坊官であった。

ついで、『平松抄』は、宗祇門弟の玄清が、『平松抄』編纂者に注釈書類を情報提供したと考えられている(片桐 1987c)。「平松抄」には、玄清が青蓮院尊応の講義を受けたとある(16 番歌注)。

このように、『或聞書』、『永正記』、『平松抄』には曼殊院 青蓮院という繋がりが見出されるが、この当時の青蓮院と曼殊院との深い関わりについては、大塚 2007、大塚 2017 に指摘がある。とはいえ、典籍の面でどれほどの共通性があったのか、引き続き検討を要する。

(5) 東家注は『両度聞書』よりも低位のレベルであること

片桐 1987b は、『永正記』の「東家の聞書」について、宮内庁書陵部蔵『古今秘伝集』の「素純聞書」よりも、「一段前の東家説」であると推定する。素純は常縁の三男で、死去直前の宗祇に古今伝授を受けた(『宗祇終焉記』)。この「一段前」とは、『両度聞書』等に発展する前

段階の注であるという意味であろう。

691 番歌「今来むと」は、百人一首にも採られた、著名な素性法師の和歌である。この歌の「長月の有明の月」について、月來說と一夜説とが対立していることが知られる(島津 2012)。『顕注密勘』において、顕昭の一夜説に対して、藤原定家が月來說を唱えて以来、一般的な注釈書は月來說に従う。『両度聞書』や『百人一首宗祇抄』も月來說である。しかし、『或聞書』、三條西家注の「付き細字片仮名交り注」、『平松抄』の東殿説は明確に一夜説を採り、『両度聞書』と対立を見せる。

常縁は宗祇以外に、数人の門弟にも古今伝授を行っている(『古今相伝人数分量』)。『古今相伝人数分量』では、門弟の各人に「十ノ物七」等と書かれ、古今伝授全体の最大七割しか伝授していないことが、常縁によって明言されている。その中でも、宗祇を「門弟随一」として認めていた(『両度聞書』奥書)。常縁は門弟に合わせて伝授レベルを変えたのであるが、その中の「門弟随一」に伝授されたのが『両度聞書』である。すなわち、『両度聞書』は最高水準の注釈書であり、そこに達しない門弟には別のレベルの教授がなされたはずである。今回見出された東家説は、まさにそれに該当すると考えられる。

(6)『内外口伝歌共』は、常縁段階で口伝があったと推定できること

『内外口伝歌共』は、宗祇流の古今伝授切紙の一つであるが、伝本は大きく三つに分かれる(新井 1979)。これを承けて、小高 2017、小高 2018、小高 2019 の一連の論考は、宗祇が常縁から 24 首の秘歌のみを伝授され、それをさらに伝授された三條西実隆が付注し、そして徳大寺実淳へと伝えた、と論じた。一方、川上 2007 は、近衛尚通が肖柏へ与えた『内外口伝歌』(斯道文庫蔵)を紹介した。それには 25 首が付注で収められている。

この常縁から宗祇へと伝わった伝本とは別の系統に、井上 1984、酒井 2021 が紹介した『古今和歌東家極秘』所収本を見出すことができた。これには「十八首秘歌事」と題して、18 首と 6 首の合計 24 首に簡略な注が付される。『古今和歌東家極秘』は常縁から東家に伝えられた秘伝が集成された本である。そもそも、常縁が 24 首の和歌を特別視した段階で、何らかの口伝は存在したはずであり、それが『古今和歌東家極秘』の注ではないか。内容の上では、宗祇系統の『内外口伝歌共』と大差ないとはいえ、宗祇に伝えられ、実隆が筆録する以前のバージョンといえる。また、陽明文庫本、斯道文庫本 25 首目「流れては」の注文は、『古今和歌東家極秘』の別の箇所での引用である。このように、『内外口伝歌共』の成立には、東家の伝承が大きく関わっていると考えられる。

引用文献

- 『或聞書中有所存抜書』……新井栄蔵編『曼殊院蔵 古今伝授資料 第六巻』(汲古書院・1992 年)
- 『古今集抄』(平松抄)……『古今集抄 京都大学蔵』(京都大学国語国文資料叢書十九・1980 年)
- 『古今集両度聞書』……片桐洋一『中世古今集注釈書解題 三下』(赤尾照文堂・1981 年)
- 『古今相伝人数分量』……藤平春男編『中世歌書集』(早稲田大学蔵資料影印叢書国書篇第七巻・1987 年)

- 秋定 2006……秋定弥生「宗祇周辺の人々 土岐濱豊後守康慶 覚書」(『鳴尾説林』第 13 号)
- 浅見 1992……浅見緑「『或聞書中有所存抜書』解題」(『曼殊院蔵 古今伝授資料 第六巻』)
- 新井 1976……新井栄蔵「桜町上皇勅封曼殊院蔵古今伝授一箱 曼殊院本古今伝授関係資料七十三種をめぐって」(『国語国文』第 45 巻第 7 号)
- 新井 1977……新井栄蔵「『古秘抄別本』の諸本とその三木三鳥の伝とについて 古今伝授史私稿」(『和歌文学研究』第 36 号)
- 新井 1979……新井栄蔵「宗祇流の古今集注釈における「裏説」について 古今伝授史私稿」(『文学』第 47 号)
- 新井 1980……新井栄蔵「解説」(『古今集抄 京都大学蔵』)
- 石神 1983……石神秀美「三條西実隆筆古今集聞書について 古今伝授以前の実隆」(『三田国文』第 1 号)
- 石神 2002……石神秀美「慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵 文明六年本『古今和歌集聞書』解題 併翻印」(池田利夫編『野鶴群芳 古代中世国文学論集』笠間書院・2002 年)
- 井上 1984……井上宗雄「室町期和歌資料の翻刻と解説 [堯尋三十三回忌追善和歌]・日吉社壇詠二十一首和歌・和歌秘伝書・古今和歌東家極秘」(『国文学研究資料館調査研究報告』第 5 号)
- 大塚 2007……大塚紀弘「曼殊院門跡の成立と相承」(五味文彦・菊池大樹編『中世の寺院と都市・権力』山川出版社・2007 年)
- 大塚 2017……大塚紀弘「中世の曼殊院門跡」(永村眞編『中世の門跡と公武権力』戎光祥出版・

2017年)

- 小高 2017.....小高道子「近衛尚通の古今伝受 切紙の伝受を中心にして」(『中京大学文学部紀要』第51巻第2号)
- 小高 2018.....小高道子「内外表裏事」(『古秘抄別本』)と『内外口伝歌共』(『国際教養学部論叢(中京大学)』第10巻第2号)
- 小高 2019.....小高道子「陽明文庫蔵『内外口伝哥』 徳大寺家の古今伝受資料」(『国文学研究資料館調査研究報告』第39号)
- 片桐 1987a.....片桐洋一「『永正記』をめぐって」(『中世古今集注釈書解題 六』 赤尾照文堂・1987年)
- 片桐 1987b.....片桐洋一「『永正記』に引用された諸注の検討」(『中世古今集注釈書解題 六』)
- 片桐 1987c.....片桐洋一「平松本古今和歌集抄」とその引用書」(『中世古今集注釈書解題 六』)
- 川上 2007.....川上新一郎「古今伝授をめぐって」(関場武編『平成十八年度極東証券寄附講座 古文書の世界』 慶應義塾大学文学部・2007年)
- 酒井 2021.....酒井茂幸「中田光子氏蔵『古今和歌東家極秘』翻刻」(『禁裏本歌書の書誌学的研究 蔵書史と古典学』 新典社・2021年)
- 島津 2012.....島津忠夫訳注『新版 百人一首』(角川ソフィア文庫・2012年)
- 武井 1989.....武井和人「三条西家古今学沿革資料襍攷 実隆・公条・実枝」(『中世和歌の文献学的研究』 笠間書院・1989年)
- 鶴崎 1988.....鶴崎裕雄「歌僧亮恵と『東路紀行(北国紀行)』について」(『文学』第56巻第9号)
- 長谷川 2008.....長谷川千尋「東常縁の歌学における常光院流の継承」(日下幸男編『中世近世和歌芸論集』 思文閣出版・2008年)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹島一希
2. 発表標題 和歌・連歌の“効用”
3. 学会等名 郡上東氏800年・古今伝授550年祭 記念式典・記念講演会「中世の武士と和歌」（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

1、講演「古今伝授切紙解説」（招待あり）、2019年5月18日、里山ギャラリー歴史・文化講座 永青文庫1、肥後の里山ギャラリー、永青文庫展 「細川幽斎 文華のDNA 当代随一の教養人 幽斎」に関連して
2、講演「東氏一族と和歌」（招待あり）、2021年3月20日、シンポジウム「東氏と古今伝授」、古今伝授の里フィールドミュージアム、登壇者：小高道子、小和田哲男、鶴崎裕雄
3、講演「和歌10首の“物語”」（招待あり）、2022年6月18日、連続講座「武士と和歌」、古今伝授の里フィールドミュージアム

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------